オランダにおける教育の自由と学力重視のせめぎ合い
―現地での観察調査をもとに―

駒井千春（教育学専攻博士前期課程）　村井尚子（教育学科）
坂田哲人（大妻女子大学）　森久佳（教育学科）

オランダは憲法23条によって教育の自由が保障されており，教育における自由のあり方を考える上で大変参考になる国である。筆者たちは，2024年３月にオランダの学校・保育施設を見学させていただき，教育の様子を見るとともに，学校関係者，保育施設関係者に取材を行った。４歳からほとんどの子どもが就学し，小学校教育の準備としての遊びを通した学びが行われていること，子どもの自己選択を重視する教育方法はいずれの学校・施設でも共通してみられた。そのような中で，オランダではPISA2022の結果を受けて，さまざまな教育に関する問題が取り上げられており，VVEプログラムなど新たな施策が実施されているところであった。これら教育の自由と，学力，とりわけ言語運用能力の低下への懸念とが複雑に絡み合いつつ行われている教育施策と現場の教育の有り様から，我々が学ぶことについて検証，考察を行った。

キーワード：オランダ，学校・保育施設，教育の自由，VVEプログラム，ウェルビーイング

１．はじめに

筆者らをはじめとして，これまでにも多くのオランダの教育制度や実践について日本に紹介されてきている。そして，日本に紹介されているオランダの教育の特徴に，「教育の自由」が法律に定められていることに触れている文献は多い[1)]。そのことは，いみじくも教育のトレンドやありかたが常に変化していることの裏側でもある。つまりは，我々はオランダの教育を語っていくうえで，常に最新の状況に敏感でなければならないということである。

筆者らは，2024年３月13日から22日の間，オランダの保育園・幼稚園２園，小学校３校と教育サポート機関を訪問した。その記録を紹介しつつ，再度オランダの教育の現状についてとらえていく。

今回の報告における一つの特徴は，幼児教育施設と初等教育学校，ならびに学校教育に関連するサードパーティの支援機関などがすべて含まれている点である。特に，近年変化が大きい幼児教育分野においての取材結果が掲載されるのは，（初等教育以上の様子が紹介されることと比較して）これまでにそれほど多くはない。

オランダはもともと４歳の誕生日より初等教育が開始される（５歳からは義務教育）という世界的に見ても早い就学年齢であるが，そうしたオランダにおいても，幼小接続問題といえるような事象が，４歳の初等教育開始段階前後をめぐって起こっており，この点に注目するなら，さながら日本と同じ現象が見え隠れする。オランダでは，特に言語活用能力（オランダ語）について強い興味が示されており，標準よりも発達が遅いと見込まれるこの年齢の子どもたちには「特別なフォローアップ（VVE Program）を受ける必要」が生じている。

まずは，オランダの幼児教育と保育の現状について概観する。オランダの保育と幼児教育は，社会福祉雇用省と教育文化科学省の管轄下にあり，生後６週間から小学校を卒業するまで子どもは保育施設に通うことが出来る。０から４歳児は保育，４から12歳児は放課後保育，０から12歳児を対象としたチャイルドマインダーサービスに分けられる。オランダの義務教育は５歳からであるが，４歳から初等教育を受ける

権利を有するため，多くの子どもが４歳になると小学校に入学する。４歳（グループ１）と５歳（グループ２）が属するISCED0は，６歳からのグループ３（ISCED1，日本でいう１年生）で行われる教育の準備という位置づけである。

VVEプログラムは，教育上の不利益を防止，軽減するために政府からの補助金を受けての支援策である。この特別教育プログラムは，２歳から６歳までの子どもを対象としており，VVEプログラムの訓練を受けた教師，保育士のサポートを受けながら遊びを通して学ぶ。この責任主体は市当局にあり，乳幼児クリニックからの紹介を受けて，対象の子どもを選定するのも市が行う。多くは上述の通り言語に障害をもつ子どもを支援することを目的としているが，子どもの社会的感情，認知発達，運動の発達もその対象となる[2)]。

小学校に関しては，平均して6.6㎢キロあたりにつき１校の小学校があり，97.6%の子どもが学校から1㎞以内の場所に住んでいる計算となる。2022年の時点で小学校段階の児童数は1,474,396人で，6,056の小学校がある。学校選択の自由については多くの先行文献で取り上げられているが，各学校は保護者向けに学校案内を発行することが法的に義務付けられており，学校案内には学校の目標，実績，指導時間などが記載されているほか，学校を比較するためのWebサイトhttps://scholenopdekaart.nl/を見て保護者たちは学校を選ぶことになる。また，教育監督局によって学校の質に関する調査報告書も作成されている[3)]。

VVEプログラムにおいて言語活用能力が重視されているのは，PISA調査における読解力の低下が大きな問題とされていることからもうかがえる。教育監督局が出している「2024年の教育事情（De Staat van het Onderwijs 2024）」においても，「生徒の言語レベルは芳しくない。最も顕著なのは2022年の国際学力調査（PISA）におけるオランダの15歳の読解力の低下である。この低下は例年よりも顕著で，また他国と比べても大きい。15歳の児童生徒の読解力は他の欧州諸国の平均を下回っている」と懸念を示している。

さらに15歳のみならず，初等教育においても読解力の低下は大きく問題視されている[4)]。

２．訪問記録

１）保育園Partou Kings and Queensの訪問

2024年３月13日午前，アムステルダムニューウェストにある保育園Partou Kings and Queens[5)]を訪問した。

Partouグループはオランダ全土で，託児（Peuteropvang），保育（Kinderdagverblijf），学童保育事業（Bso）を運営している。13日に見学したPartou Kings and Queenでは，２歳から４歳までの保育と小学生を対象にした学童が併設されている。また，14日には，Partou Kings and Queensから２キロほど西にあり，２歳までの託児が行われているPartou Childcareの様子も見せていただいた。

13日は，２時間ほどの間，保育環境を見学させていただき，園長のHairud先生からお話を伺った。撮影が許可されなかったため，写真は掲載していないが，保育時間は８時半から13時で，子どもによって登園する曜日や時間が異なる。１クラス16人に保育士が２人配置されており[6)]，保育士が設定したプログラムに沿って１日の保育が行われる。内容は，学校とのコラボレーションが重視され，学校と連携しながらそれぞれの子どもに合わせたプログラムが実施される。また，言語の発達に問題があるとされた子どもに対して，保育時間外においてVVEが行われるという。

Hairud先生の話の中で，「リスクが許容されている」ことについて語られていた。事故があった場合，保育者に責任を負わせるのではなく，環境に問題があったとする意識で保育を行っているという。たとえば，子どもが糸くずを飲み込んでしまった場合や外で遊んでいて園外に出ていってしまった時，保育者の監督不足ではなく，糸くずが落ちている環境や，外に出てしまう状況に注目するという。そして，そのような行動を起こした子どもにも責任があると

いう考え方をとっている。この考え方は日本とは大きく異なっていると言えるだろう。

２）幼稚園Impuls Voorschool Timotheusの訪問

３月14日午後，前日に訪問したPartouと同じ地区に位置する幼稚園Impuls Voorschool Timotheusを訪問した。小学校であるTimotheusschool内に併設されている幼稚園であり，２歳から４歳までの幼児教育が行われている。訪問時，園児は降園しており，教室で3人の先生からお話を伺った。本園は，ピラミッドメソッド[9]を導入し，小学校準備教育に重点を置く園であり，地区のなかでも人気の園であるという。また，幼稚園教諭が週に一度小学校を訪れて，就学前の子どもに何が期待されているかを観察したり，小学校教諭が幼稚園を訪問したりするなど，幼稚園と小学校の密な連携が行われている。お話を伺う中で，身の回りのことを自分でできるようにしたり，パズルを始めたら片付けるまで次の遊びができないよう指導するなど責任をもって最後まで成し遂げたりすることをトレーニングすることが強調されていた。しかし，就学前の段階で求められている能力を，子どもには知らせてはいけないという。就学前教育を通して子どもに自信を持たせることが重要であり，できないことをさせるのではなく，できることをあえてさせ，プライドを傷つけないようにしているという。そのためには，子どもの興味のサインを見逃さないよう，子どもの様子を観察することが重要であると考えられている。さらに，遊びの邪魔をしないように次のレベルの遊びへ誘導し，その遊びをすることについて自分で選んだのだと思わせるよう工夫している。また，子どもの価値観を尊重することも強調され，誰かが自分の声を聞いてくれるという意識をもたせることも重視される。発達に遅れが見られる場合，６週間ほど様子を見て判断し，VVEプログラムを受ける。

３）小学校Montessori De Belevingの訪問

３月18日午前，北ホラント州プルメレントにある，モンテッソーリ教育を行う小学校Montessori De Belevingを訪問した。

図１　モンテッソーリ小学校の外観

我が国では，幼児教育においてモンテッソーリ教育を導入している幼稚園，保育所等は数多くあるが，小学校教育においてモンテッソーリ方式を導入している例は現在のところごくわずかでありいずれも一条校ではない。オランダでは，オルタナティブ教育を行っている小学校は多く，モンテッソーリ教育を実施している学校も多数見られる。

この学校では，朝のサークル対話や教室の様子などを見学し，ティーチングアシスタントのMaxime van Roode先生にお話を伺った。本校では，１・２年生（日本でいう４歳児，５歳児），３～５年生（日本でいう１年から３年），６～８年生（同４年から６年）で構成される３つの異年齢クラスがあり，児童は８時45分に登校して14時半に下校する。１・２年生クラスのサークル対話では，教師と児童が円形に並べた椅子に座り，円を描く練習や，色のカードを使って２つの色を混ぜると何色に変わるかなど，最近学んだことについての復習が行われていた。１・２年生（グループ１，２）の一日の

表１　モンテッソーリ小学校における グループ１、２のスケジュール

登校～10:15 サークル対話，活動
10:15～11:00 フルーツ，外遊び（ジム）
11:00～11:30 活動
11:30～12:00 外遊び
12:00～14:00 ランチ，活動
14:00～14:30 外遊び，下校

スケジュールは次の通りである。

グラウンドが狭いため，外遊びの時間が被らないように設定されていたり，６～８年生は15分読書の時間があったりするなど，多少の違いはあるが，いずれのクラスでも活動と外遊びを中心に一日を過ごす。活動の時間はそれぞれがタスクに取り組むが，「ダヴィンチDe Vinci」プログラムや，「ピースフル（Vreedzaam）スクール」プログラムを行うこともある。タスクは，カード型の学習教材で，体系的に自分のペースで学習を進めることができる。子どもたちが体育の学習のために体育館に行っている間に教室を見せていただいたが，算数のタスク教材は非常に構造化されたかたちで学習が進展するように作られており，また，大変整頓された状態で配置されているのが印象的であった。秩序を重視するモンテッソーリの考えを体現していると感じられた。

図２　タスクの入っている棚

図３は，子どもたちがタスクで学習している様子である。

図３　タスクで学習している様子

ダヴィンチプログラムは，DaVinci Academieが開発したプロジェクト学習のプログラムである[10]。ダヴィンチプログラムを通して社会や理科の内容を学び，副次的な効果として協調性やコミュニケーション能力を身につけることが期待されているという。また，プロジェクトが完成した際に保護者に成果を発表するなど，保護者が学校に入りアドバイスやコメントをする機会も定期的にあるという。

ピースフルスクールプログラムは，オランダの教育サポート機関であるエデュニク社が，ニューヨークの「コンフリクトを創造的に解決するプログラム（Resolving Conflict Creativity Program）」をもとにして，ユトレヒト大学のミシャ・デ・ウィンター（Micha de Winter, 1951-）教授の指導のもと，1998年から開発したプログラムである[11]。プログラム開発の目的は，移民の増加とともに様々な背景をもつ子どもが増え，学校においていじめや暴力などの問題に対処するためである。Montessori De Belevingは，このプログラムを10年前から導入している。後述するCEDでは，このプログラムの小学校や保育園への導入を支援している。

Maxime van Roode先生によると，いずれの活動においても，児童は「先生に教えてもらう」という意識はなく，主体的に取り組むという。また，学校のルールについて児童と教師が一緒に話し合って決めるが，児童が自分で決めたと思うことが重要であり，教師は児童が決定

したことに従わせることを重視しているという。さらに，モンテッソーリ教育の魅力は，自分に合ったレベルで教育を受けることができることにあるという。それぞれのレベルに応じた活動（タスク）が用意されているため，みんなで同時に同じことをするのではなく，自分のペースで自由に学習を進めることができるという。

4）小学校OBS De Hasselbraam(Janaplan-school）の訪問

３月19日午前，南ホラント州ライデルドルプにある，イエナプラン教育を行うOBS De Hasselbraamを訪問した。

図４　イエナプランの小学校の外観

この学校は，ライデンとライデルドルプに20校の小学校をもつPROOグループ[12]に属する。クラスの様子や校内を見学した後，校長のBabette van Leeuwen先生にお話を伺った。低学年のクラスでは，サークル対話で読み聞かせなどが行われていた。居間の教育を重視するイエナプラン教育においては，サークル対話は要の役割を果たすと考えられ，これまでに訪問した他のイエナプラン学校で実施されていただけでなく，オランダの多くの小学校において導入されている。

その後，いくつかの遊びが書かれた表の中から取り組みたいものを選び，ネームプレートを貼り付けてから各自作業に取りかかる。自分がどの遊びを選ぶかは，ある程度個人の自由に委ねられている（ただし，ある程度の分散をはかるためにサークル対話において教師が調整を行う場合が多いようだ）。この自由は責任を伴っており，自分が選んだ遊びに途中で飽きても，決められた時間内（30分程度）はその遊びを続けることが求められる。次の時間帯には他の遊びを選ぶこともできるが，その場合も他の子どもとバッティングした場合には調整が必要となる。日本で言えば４歳児，５歳児の学年の幼児たちにあたるが，オランダらしい自由と責任，自律性を養う教育がこの段階でなされている。ちなみにこの方法はイエナプランのみならず，多くの小学校のグループ１，２のクラスで導入されている。

図５　ネームプレートが貼り付けられた作業表

図６は，低学年の日課表である。サークル対話，遊びと作業，外遊び，フルーツを食べる，サークル対話，外遊び，ランチ，遊びと作業，サークル対話，下校という日課になっている。

図６　低学年の日課表

上述したようにサークル対話が非常に重要な役割を占めているのがわかる。また，フルーツは，子どもたちの栄養状態がよくない（偏食など）ことに問題意識をもった政府から支給されているのだという。

高学年のクラスでは，授業が行われていた。算数とリーディング・スペリングは主に教材会社から購入したものを用いて授業を行い，その他は学校で開発したメソッドが用いられる。学校で開発されたメソッドとは，“education in culture”（文化における教育）と“education about culture”（文化についての教育）を連携させることである。“education in culture”では，教科についての知識やスキルを扱う。“education about culture”では，“education in cultureで得たことを実践する。たとえば，学校に国から予算が入ってきたときに，政治や選挙の仕組みについて学ぶ（education in culture）。そして，それについてどう思うか，どう考えるかを議論する（education about culture）。教師も議論に入って一緒に考えるが，アドバイスはしないという。

OBS De Hasselbraamはイエナプランを実践しているが，イエナプランの信念から特に重視したいことを抽出して問い直し続けているという。また，自由，平等，連帯，民主主義をテーマにした学びが展開される。伝統や文化について学ぶために，以前はキリスト教についてだけであったが，近年は，年に２つの民族や宗教を強調して，それぞれの当事者や信者を学校に招き，子どもたちの信仰とは関係なく祭などを体験する。また，文化の違いを具体的に教えるという。たとえば，「尊敬」という言葉について，文化によって握手やおじぎなど様々な表現方法があることを伝える。教師はそれらのテーマについて新聞の記事などから教材を準備する。そして，教師同士で経験をシェアし，理論と実践をふりかえり，今後必要なこととそうでないものを見極めて，改善が繰り返されていく。

５）Public Dalton Elementary School Poseidonの訪問

３月20日午前，アムステルダム東部ハーヴェンアイラント＝オーストにある，ドルトンプラン教育を行う小学校Public Dalton Elementary School Poseidonを訪問した。

図７　ドルトンプランの小学校の外観

この学校は，アムステルダムに28の小学校をもつAMOSグループ[13]に属する。ドルトンプラン教育は学力が上がりやすいなどの理由でオランダのオルタナティブ教育の中で最も人気があるとともに，人口が増加し続けている沿岸の開発地域という立地から，児童数が増え続けているという。４歳から12歳までの児童400人が在籍し，ギフテッド，進度が早いクラス，ゆっくりのクラスの３つのレベルのクラスがあり，特別な支援を必要とする児童もいる。一般的な学校に在籍していたが，行動に問題があるという理由で転校してくる児童の場合は，１年ほどで問題が見られなくなることが多いという。2009年の設立当初から明示的直接指導（Expliciete Directe Instructie[14]以下，EDI）を用いた授業を行っている。EDIとは，政府が示す直接指導（Directe instructie[15]）から発展したもので，EDIのほかにもいくつかのモデルがある。EDIモデルを使うことで，それぞれの子どもに応じた適切な指導ができるという。また，学校のルールについては，児童と教師たちが一緒に作成した学校の憲法があり，いじめや物の使い方などについての決まり事が定めら

れていて，安全な環境を保証しているという。

図８　アンネ・フランクの学習

図８は『アンネの日記』でわが国でも知られるアンネ・フランクの学習教材である。世界の平和と平穏を夢見ていたが，1944年８月４日にナチスによって捉えられ命を落としたユダヤ人犠牲者と書かれている。オランダでは多くの学校でアンネを教材として平和について学習している姿を目にした。

６）教育サポート機関CEDの訪問

３月20日午後，南ホランド州ロッテルダム北東部にある，教育サポート機関Foundation CED Group（以下，CED）を訪問し，Carla van Doornen初等教育部門マネージャーにお話を伺った。CEDは，「すべての子どもたちにチャンスを与えること」をミッションとして掲げ，教員研修や教材の開発等を行う組織である。具体的な内容として，“Teach Like a Champion”に基づく教員研修，ピースフルスクールプログラム（Vreedzaam school programma）の提供，読書教育教材Nieuwsbegripの普及と授業指導，OGD4D（Opbrengstgericht werken in 4D）[16] アプローチに基づく教育の質の向上がある。以上の４つがCEDの主な事業である。

図９　CEDグループの入っているビル

“Teach Like a Champion”とは，ニューヨークで出版されたダグ・レモフ（Doug Lemov, 1967-）の『Teach Like a Champion 3.0』をオランダ語に翻訳し，オランダの教育制度を反映させた教師向けの本である。内容は，生徒に対して目覚ましい成果を上げた教師について，教室でのふるまいや言動を詳細に観察した記録である。ピースフルスクールプログラムについて，Carlaによると，宗教的文化的背景の異なりから生じる問題は多様であるが，その中には共通性があり，問題の根本解決のために，まずは学校を安全な場所にすることが必要であるという。そのためにすべての子どもがピースフルスクールプログラムに参加することが有効であるという。このプログラムでは，シティズンシップ教育，民主的共同体（democratic community），紛争の解決，子どもの仲介者（pupil mediators），行動的市民のための実践（practice for active citizenship），参加（participation）がテーマとなる。主に，０歳から初等学校の児童を対象にして，それぞれの発達段階に応じたプログラムがある。Nieuwsbegripは，国語に関する学習教材であり，読むこと，単語，作文などいくつかの要素に分けて，６つのレベル別に作成されている。

OGD4Dアプローチに基づく教育の質の向上とは，教育の実践を教師の個人的な経験にとどまらせないよう，教師の教育実践を蓄積し，科学的に分析して，エビデンスに基づいた質の高い教育を行うことである。

また，オランダの教育におけるトレンドとして，教師不足，特別なニーズ，平等と公平，読むことと算数，シティズンシップ教育があげられた。

３．まとめと考察

多様な教育の実践を観察した中で，５つの園・学校において共通していることは，子どもの自己決定を尊重することである。幼児教育においては，保育者は小学校の準備教育を念頭に置いた環境設定を，それぞれの子どもに合わせて行い，その環境のもとで，子どもは遊びを通して自己決定を繰り返し，自信と学びを得る。小学校では，様々なプログラムや柔軟な時間割により，子どもは強制されることなく自分の意思で学校での過ごし方や学び方を選択することができる。しかし，「教育の自由」に基づく様々な教育実践を行い，子どもに選択肢を用意するのは大人である。すなわち子どもは用意された選択肢の中から自分で自由に選ぶことができる，という意味でのある程度制約された自由の中で過ごしているといえる。実際にお話を伺う中で，「自分で選んでいるようにみせて選ばせている」ことが当然のように語られ，大人が想定する範囲内で子どもを誘導しているようにも思われた。しかし，ピースフルスクールプログラムや学校で開発されたプログラムの方針として，大人が答えを提示したり導いたりするのではなく，一緒に参加して正解のない問いなどについて子どもと議論する場が大切にされていた。このことから，大人が子どもを誘導したり操作したりする意図で子どもに選択させるのではなく，幼児期から自分の意志で判断する自己決定の経験を重ねる環境を用意することが重視されているといえる。以上のようなオランダの教育者がもつ子ども観や教育観が，子どもの自己肯定感や幸福度が高いことなど，子どもの幸福に貢献しているといえる。オランダは，世界情勢の変化により，移民が増加することに伴って，言語という現実的な課題を抱えることになっているが，「教育の自由」に基づく教育の方法の多様性と，自己決定を尊重する教育観によって，新たな課題解決策が導かれると思われる。

本稿の冒頭において，オランダの教育は変わりやすく常にトレンドを追い続ける必要があるという旨を述べた。本稿で紹介してきた事例の中でも，国内外から実に多様な方法論を積極的に採用し，現場で洗練させていく様子が描かれている。これらの方法論は，良いものは残り，広がりを見せる一方で，良くないもの，使い勝手の悪いものは，次の瞬間には存在しないだろう。したがって，改めて訪れた際には，その様子が全く違うということがあっても不思議ではない。オランダが原則「出口主義（成果保証型）」であるため，プロセスに対してはより学校ごとの裁量がある。それが上述の流れを生んでいるのだろう。したがって，現場で使われ，さらに長い期間活用されている方法論については，一目に値するといっていいだろう。今回の報告でいうならば「ダヴィンチDe Vinci」プログラムのその後については，継続して追っていく価値があるといえる。

トレンドは言い換えるならば「社会の状況に敏感に反応している」ということでもある。オランダの教育に関する日本への報告は数多いということを触れたが，その中でも必ずしも多くない保育の分野（４歳未満で小学校に通う前の子どもたちの施設）を取り扱ったことで，社会との関係性を把握することにもつながった。

そのことを踏まえてオランダの教育の事情を述べると，一つには，オランダは現在「言語習得」に関する課題を抱えているということである。

VVEプログラムは，言葉の発達が学校教育レベル（特に６歳，第３学年までに求められる水準）に達していない場合に手当てされるプログラムであると本稿で紹介したところだが，この対象者は，いわゆる「発達的に」言葉の習得が

難しいとされる子どもに限らないということになる。

オランダをはじめとする欧州の国々は，特に中東からの移民（難民）を積極的に受け入れる政策をとっていた。現在は，その流れに反発をするような動きも目立ってきたが（例えば，BREXITを引き起こしたトリガーの一つも移民受け入れに起因するといわれているし，ドイツなども最近は反移民政策を主張する政党が支持を集めている），移民を受け入れる際に避けては通れないのは，言語の問題である。

いわゆる「転校」してきた子どもたちもさることながら，仮にオランダで生まれた子どもであったとしても，家庭の中ではオランダ語は話されていないため，オランダ語を習得する機会に欠けることとなる。このことが，オランダ語という言語（≒母国語）の獲得を妨げる／遅らせる理由となっている。ましてや，オランダの教育の特徴でもある「学校設立の自由」を盾にオランダ語を第一言語としない学校を作ることも理論上は可能であるということである（実際に存在しているという話も聞くが，実在は確認できていない）。

非言語的なコミュニケーションがいくら可能だといっても，言葉が通じないという状況に陥れば，それを除けようとする動きが生じないという保証はない。これも本稿で紹介したピースフルスクールの取組や，市民性教育の考え方は，背景にこうした多様なバックグラウンドを持つ子どもたちが安心して学校生活を送ることができるようにというように配慮された結果，導入に至っているという見方をすることもできるだろう。

このように，オランダの教育は多くの課題を抱えている。課題が多いという点においては，我が国も同様であるが，上述した「2024年の教育事情（De Staat van het Onderwijs2024）」に見られるように，毎年教育に関するエビデンスデータが詳細に分析され，その分析に基づいた政策が実施されている。もちろん，その政策が即効性を持って奏功しているとは言い難い面もあるが，そのスピード感，データに基づいた政策決定の有り様には学ぶところが多いのではないだろうか。

もっとも，オランダのみならずヨーロッパ各国にも当てはまることだと言えるが，PISA調査の結果といった数値的な学力に目を向け過ぎていることは問題視すべきだと言えるだろう。子どもたちがなんのために学び，将来どんな社会を創っていくのか，その社会で子どもはもとより大人，高齢者がどのように幸せな生活を営めるか，というウェルビーイング（Well-being）の観点こそが求められるのではないだろうか。

このウェルビーイングの観点は，オランダが世界幸福度ランキングで上位にいるなど，「幸福度の高い国」として日本国内で注目を浴びた背景と関わっている。最近の調査でも，2024年３月に公表されたイプソスグローバル幸福感調査レポートでは，「すべてのことを総合すると，あなたは「とても幸せ」「どちらかといえば幸せ」「あまり幸せではない」「まったく幸せではない」のうちどれだと言えますか？」という質問に対して，「幸せである」と回答した割合がオランダは85%でトップだった（30カ国が参加した調査の平均は71%。日本は57%で28位）。また，子どもの幸福度に関しても，2020年に公表されたユニセフ・イノチェンティレポートカード16によると，子どもの幸福度（精神的幸福度，身体的健康，学力・社会的スキル）に関する総合的な順位はオランダがトップだった（同調査で日本は20位）[17]。さらには，オランダではウェルビーイングがEUで最も高いという報告もある[18]。ウェルビーイングは近年，我が国でも注目されている概念であるが[19]，多様性に端を発する困難な課題に直面しているにもかかわらず，幸福度やウェルビーイングが高いという特色は見逃せない。また，オランダの現職の教職員の仕事の満足度は８割以上が満足しているとの報告もあり[20]，教師のウェルビーイングが高い状態にあるともいえる。

しかし，その一方で，オランダは教員不足や教員の高齢化，離職の増加や，教員志望者が少ないことが問題となっている[21]。ユネスコの

『教員に関するグローバルレポート』（Global Report on Teachers）においても，教員不足は世界的な課題であるなかで，オランダは，フランスやオランダ，イギリス，アメリカ，そして日本等の先進諸国と同様に，増加する離職教員の補充ができず，新たな教員を雇用できていない現状が報告されている[22)]。幸福度の高い理想的な国として日本では注目されているオランダではあるが，日本と同様の課題も抱えている点に留意しながら，オランダの教育のトレンドを追究する必要があるだろう。

注

1）もっとも大きな影響を与えたのはリヒテルズ直子の『オランダの教育：多様性が一人ひとりの子供を育てる』2004年，平凡社であろう。リヒテルズは，本書のあとにも『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』2006年，平凡社，『オランダの共生教育』2010年，平凡社などに加え，苫野一徳と共著で『公教育をイチから考えよう』2016年，日本評論社，『公教育で社会をつくる；ほんとうの対話，ほんとうの自由』2023年，日本評論社などを出版している。

2）https: //eurydice. eacea. ec. europa. eu/national-education-systems/netherlands/early-childhood-education-and-care（2024年11月４日閲覧）

3）https: //eurydice. eacea. ec. europa. eu/nl/national-education-systems/ netherlands/organisatie-van-primair-onderwijs（2024/11/4閲覧）

4）De＋Staat＋van＋het＋Onderwijs＋2024＋inclusief+sectorbeelden%20.pdf（https:// www. onderwijsinspectie. nl/documenten/rapporten/2024/04/17/rapport-de-staat-van-het-onderwijs-2024より2024年11月４日にダウンロード）

5）https://www.facebook.com/partoukingsandqueens/（2024/11/4閲覧）

6）配置人数の詳細は聞き取ることができなかったが，「乳児グループでは，１人の保育士が最大３人の子供を世話できる」ということから，２～４歳児それぞれ16人に対して保育士２人が配置されていると思われる。オランダの保育士配置基準は，それぞれの園で計算されるBKR（プロフェッショナル・チャイルド・レシオ）に基づく。
https: //business. gov. nl/regulation/professional-childcarer-child-ratio/（2024/11/4閲覧）。

7）福田紗耶香「オランダの補償的就学前教育のカリキュラムにみる科学的根拠の位置づけ」九州大学人間環境学研究院国際教育文化研究会『国際教育文化研究』20巻，2021年，27頁。

8）Nederlands Jeugdinstituut. “Voor- en vroegschoolse educatie (vve). https: // www. nji. nl/voor-en-vroegschoolse-educatie-vve（2024/09/04閲覧）

9）ピラミッドメソッドは，教育学者Jef J. van KuykとCITOテスト・アセスメント研究所のチームによって保育園や幼稚園の教師との綿密な協力のもとに開発された。オランダの幼稚園の64%で利用されている。このように，オランダの小学校の低学年や保育施設では，プログラムを利用した保育が行われており，この点がそれぞれの保育者が独自のカリキュラムのもとに保育計画を立てている日本とは異なっていると言える。(McKenney, Susan, Jos Letschert, and Jo Kloprogge. "Early childhood education in the Netherlands: The first steps." *The education of the 4 to 8 years olds: re-designing the school entrance phase*. CIDREE/DVO, 2007. 53-62.)

10）https: //www. davinci-education. com（2024/11/4閲覧）ただし，ダヴィンチプログラムについては十分には精査ができていない。

11）奥村好美「オランダにおける市民性教育を通じた学校改善―ピースフルスクールプログラムに焦点をあてて」「紀要」編集委員会編『教育目標・評価学会紀要』，2016年，22頁

12）PROOホームページ https: //prooleiden. nl/onze-scholen/（2024/09/05閲覧）

13）AMOS onderwijs ホームページ https: // amosonderwijs.nl/（2024/09/05閲覧）

14）Onderwijskennis. “Expliciete Directe Instructie tilt school naar een hoger niveau”. https: //www. onderwijskennis. nl/kennisbank/expliciete-directe-instructie-tilt-school-naar-een-hoger-niveau（2024/09/05閲覧）

15）Nationaal Programma Onderwijs. “Directe instructie”. https: //www. nponderwijs. nl/interventies/directe-instructie（2024/09/05閲覧）

16）4D とは date（データ），duiden（解釈），doelen（目標），doen（行動）のことである。CEDgroep. “Wat is opbrengstgericht werken (OGW)?”. https: //www. cedgroep. nl/themas/artikel/wat-is-opbrengstgericht-werken-ogw（2024/09/05閲覧）

17）ユニセフ・イノチェンティ研究所『イノチェンティ　レポートカード16　子どもたちに影響

する世界：先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か』公益財団法人日本ユニセフ協会，2020年。

18）「オランダのウェル・ビーイング，欧州でトップクラス」https://www.portfolio.nl/news/post7771/（2024年11月４日確認）

19）例えば，2023年６月16日に閣議決定された第４期教育振興基本計画のコンセプトは，「2040年以降の持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」である。また，ウェルビーイングを関した大学の学部や学会も創設されている。

20）三島菜央「働きたい学校で働けるオランダの公立学校の採用と異動」教育新聞，2024年５月５日（https://www.kyobun.co.jp/article/2024050503）

21）谷哲弥「オランダにおける教員養成の取り組み：オランダの教育視察から」『真宗総合研究所研究紀要』39，大谷大学真宗総合研究所編，2021年。

22）UNESCO，*Global Report on Teachers: Addressing teacher shortages and transforming the profession*, 2024, p.18.

本研究の一部は，科学研究費補助金基盤研究（C）「教師の身体知の編みなおしを可能とするリフレクションの手法の開発と検証」の助成を受けている。